

『古事記』の神武東征物語考

——その地名ウダなど——

奥 田 尚

は じ め に

初代天皇神武が架空の存在であることは、もはや常識といってもよい。『古事記』（『記』）は712年に成立したことには、根強い反対論があるものの、712年成立説を積極的に否定すべき論拠はまだ提示されておらず、『記』の成立は712年でよからう。『日本書紀』（『紀』）は720年の成立とみることに、異論は提起されていない。

8世紀初頭に成立した『記』『紀』に、初代天皇とされたのが神武であるが、神武のように漢字2字で表記される天皇号のほとんどは、奈良時代の後半つまり8世紀の後半に淡海御船によって、一括して命名された。『記』『紀』の成立時点には、まだ存在していなかった天皇名表記である。『記』『紀』の天皇名の表記は、たとえば初代天皇を「カムヤマトイハレヒコ天皇」とするような、ヤマト言葉（以下「倭語」とする）によっている。

倭語の原形を追求することは、日本人の原形を追求することでもあり、とても手に負える問題ではない。問題を簡単にするために、縄文時代に倭語の原形が存在したと考えておこう。次の紀元前3世紀頃にはじまる弥生農耕文化は、中国の長江下流域から直接に伝来した小部分があるものの、大半は長江下流域から山東半島と朝鮮半島を経由して、日本列島に伝えら

れた。文化の伝播を情報のみの伝播ととらえるのは間違いで、多数の文化保持者の移住によって伝えられたことは疑えない。

移住者の持ち込んだ少数の中国江南系言語、中国系言語の朝鮮的変形語、多数の朝鮮南部言語が農耕文化とともに伝わり、縄文倭語と混ざりあった。こうして成立した弥生倭語は、縄文倭語と特に朝鮮系言語との対応のなかで、一語に多様の意味を込めた言語とならざるをえなかった。また地域的権威者が成長した3世紀末以降の古墳時代は、地域的権威者を中心として地域的文化・経済の保持がなされる。全体的には朝鮮半島の文化的影響下にあったものの、地域的文化・経済の成長によって、その影響は直接的ではなかった。この時期は言語の面からいえば、弥生倭語の成熟期とみてよからう。

中国王朝への朝貢は弥生末期の3世紀後半に、邪馬台国の卑弥呼によって行なわれた例は有名であろう。魏国皇帝からは中国語による詔書が交付されており、卑弥呼の側近には漢字を使用できる者が存在した。5世紀代にはいわゆる「倭の五王」が登場し、中国南朝宋に漢文の上表文を提出した。この「倭」は、私見では朝鮮半島南部の地域的集団であると考えるが、朝鮮半島南部の権威者がそうした文化水準にあることは、同地域と関係の強い日本列島の地域的権威者もまた、同水準であったとみてよい。中心的権威者の周辺に3世紀末以来一貫して漢字を使用する者が存在したのであるから、漢字使用はかなりの広がりをもせ、漢字を記した資料はかなりの蓄積があったはずである。

ところが弥生時代での漢字使用痕跡を残す考古学的資料は皆無であるし、古墳時代でも僅少例にとどまる。この資料の残存状況と上記の中国史料からの推定漢字使用状況には、大きな落差がある。このことは当該時期の倭社会の構造を考える重大な手がかりであるが、ここでは詳述を避けたい。

ひるがえって考えれば、弥生農耕文化の伝来は、縄文時代の採集経済・文化を根底から変革した。古墳文化の成立は、高塚築造という大陸文化の

朝鮮経由での受容であるが、高塚を築造する文化は、すでに弥生期にも自然発生的に存在した。したがって高塚築造文化の伝来は、当該期の経済・文化を一変するようなものではなかった。その後に伝えられた仏教文化は、倭人の精神世界観と物質世界観を一変させるものであり、根底的な経済・文化の変革であった。

仏教文化の受容とともに、漢字使用が一般化した。仏教文化の伝播は、これも移住を伴った。『紀』などに記された、百済からの仏教関連文物の朝廷への贈与は、仏教文化の伝播の真相ではない。仏教の伝来は538年か552年かという問題があることはよく知られているが、それは仏教文物の百済からの贈与の時点に関する問題にすぎず、これを仏教文化の伝来と同一視できない。

『隋書』倭国伝には、百済から仏教を受容してはじめて、漢字を使用するようになったとの記述がある。はじめて漢字を使用するというのは、中国からみてその地が中国文化の、したがって中国皇帝の恩恵に属するようになったとの表現である。現存の諸文献から復原しうる倭語の漢字表記が、さかのぼっても7世紀初期の推古朝であることは、漢字使用がその頃から地方支配者を含む支配者層にも一般化した証拠とできる。

漢字使用の地方豪族層にまでの広がりや、漢語の倭語への採用、ならびに倭地域での漢字発音と倭語発音の双方の変化をもたらす。弥生倭語の成立にも比すべき倭語の大変革があった。弥生倭語の成立に際して、一語彙に対応する意味の重層化がみられたが、同様の重層化がここでもさらに進行した。

重層的な意味を積み重ねられた倭語は、良くいえば変幻自在の、悪くいえばどうにでも解釈できる言語となった。『記』『紀』はそのような性格を持つ倭語を、漢字で表現したものであるから、そこに記された物語の分析は、いかに「深読み」をしてもしすぎることはないものといえる。本稿では、神武東征物語に表われる「ウダ」などについて、そこに込められた重

層的な意味を、できるかぎり提示してみたい。

歴史研究者は、史料に禁欲的に接することを、伝統的に訓練されてきた。また同時に先行業績の蓄積の上に立つ研究でなければ、評価されないことをたたき込まれてきた。『記』『紀』のように高度に政治的な意図を持って編纂された史料に、禁欲的に接するとすれば、両史料が基底とする政治性の批判にまでは踏み込むことができず、結局は両史料が描いたままの歴史像の枠組みである「天皇制賛美」を越えることができない。先行業績の蓄積の上に立つ研究というのも、結局は上記のようにして蓄積された天皇制賛美の枠組みの上に立つ研究ということであるから、賛美に加担する方向となる。

これらの反省の上に立てば、『記』『紀』を扱う研究にあっては、史料に対する禁欲性を捨てざる必要があり、先行業績の蓄積を無視した方向から研究を進める必要がある。このような認識に立脚して、本稿を展開してみたい。なお神武天皇に関する先行業績については、星野良作『研究史・神武天皇』（吉川弘文館）にその大略が示されている。

1 神武の名をめぐる

神武は、太陽神の性格を兼備するアマテラス大神の後裔である。アマテラスの子がアメノオシホミミであり、孫がヒコホノニギで、ヒコホノニギが神界から現実世界〔日向〕に降臨する。ヒコホノニギの子がヒコホホデミであり、孫がウガヤフキアヘズであり、ウガヤフキアヘズの子が神武となっている。

神武は『紀』に「諱」〔実名に近い名〕を「ヒコホホデミ」というとし、祖父と同名である。このことは津田左右吉がすでに指摘し、祖父と神武は物語の原形では同一人物であったものが、二人物に分裂させられたと述べた（『津田左右吉全集』第1巻・岩波書店）。

神武の祖父のヒコホホデミは、誕生にあたって母が産室に火を放っており、その火の中で誕生する。「火」の読みは「ホ」でもあるから、ヒコホホデミの「ホホ」の「ホ」はそれによる名である。また「ホ」には「典型的な」とか「秀でた」とかの意味があり、ホホは「典型的な『ホ』」の意味になる。ヒコホホデミの名は、「ヒコ〔男〕・ホホ〔典型的なホ〕・デ〔表面化する〕・ミ〔霊〕」であり、「ホ」に種々の形容語を付しているにすぎず、名の中核は『『ホ』霊』にすぎない。

祖父ヒコホホデミの父のヒコホノニニギは、『記』では「この豊葦原水穂国は、汝の知らさむ国ぞ」として降臨させられた。神武即位前紀では「この豊葦原瑞穂国を挙げて」アマテラスがヒコホノニニギに授けたとある。ミヅホは、『記』の表記のように「水（みづ）」・「穂（ホ）」でもあるし、『紀』のように「瑞（みづ）」〔めでたい〕・「穂（ホ）」でもある。

「ホ」には「秀（ほ）」つまり「最も優れた部分」の意味があるから、「ミヅホ（水穂）」は水の最も優れた部分として「ミヅ〔水田に植えられた〕ホ〔稲穂〕」を指すし、「ミヅ〔水のなかの〕ホ〔典型〕〔つまり水の中の水〕」の意味でもある。

「ホ」はまた「穂」であり「穀物の実の集合」を意味し、「ミヅホ（瑞穂）」は「ミヅ〔めでたい〕ホ〔穂つまり稲の穂〕」を指し、同時に「ミヅ（瑞）ホ（秀）〔典型〕」であって「瑞のなかの瑞」すなわち「崇高」を意味する。ミヅホは「典型的な水」であり、「稲穂」であり、「崇高」でもある。この重層したイメージの「ミヅホ」の「ホ」によって、ヒコホノニニギの名が成立している。

またヒコホノニニギの名は、「ヒコ〔男〕・『ホ』〔重層イメージ〕・ノ〔助詞の「の」〕・ニ〔瓊（ぬ）の母音交替形の「に」で玉つまり霊〕・ニギ〔賑わう、つまり盛んである〕」のイメージによるもので、「ホ」に種々の形容語を付加しているだけで、それを除けば『『ホ』霊』だけが名の中核となる。

ヒコホノニニギの父のオシホミミは、アマテラスとスサノヲのウケヒ（誓約により潔白を証明する方法）によって誕生する。アマテラスは女神であり、スサノヲは男神であるから、両者の子という寓意が込められている。アマテラスは一種の太陽神であり、太陽は「火」の集積物であるから、アマテラスの子は「火（ほ）」の性質を分有する。またスサノヲは『記』に海原の支配を命じられ、『記』『紀』に常に泣き叫んだとあり、暴風雨神の性格を持つ。スサノヲは水神の一種とみなすことができ、スサノヲの子は水神の性質を分有する。オシホミミの「ホ」は、アマテラスから継承した「火」の「ホ」でもあり、スサノヲから継承した「水」の「ホ」でもある。オシホミミの名は、「オシ〔支配する〕・『ホ』〔火と水の重層イメージ〕・ミミ〔霊霊〕」であり、「ホ」に種々の形容語を付加したもので、それを除けば『『ホ』霊』だけが名の中核である。

オシホミミもヒコホノニニギもヒコホホデミも、名の中核は『『ホ』霊』である。つまり重層的な「ホ」のイメージ〔霊〕があって、それに「支配する」という言葉を付加してオシホミミの名が、「男であり、盛んである」という語を付加してヒコホノニニギの名が、「男であり、表面化する」という語を付加してヒコホホデミの名が構想されている。三者の名は「ホ霊」に集束するもので、「ホ霊」に形容語を付加して三人物としたにすぎない。

オシホミミ・ヒコホノニニギ・ヒコホホデミと、「ホ霊」から構想された3つの名が連続し、「ホ」のつかないウガヤフキアヘズが挿入されて、神武ヒコホホデミとまた「ホ」の名にもどる。

ウガヤフキアヘズの挿入は、オシホミミ以下神武までの代数を5としたかったためと、日向在住の代数を3としたかったためと津田左右吉はいう。3や5は中国の陽数尊重の思想によると説明する。

挿入されたウガヤフキアヘズの名は、『記』に「鵜の羽を葦草（かや）」にして産室を造ったとあり、『紀』の別伝にも同じ説明を付すものもあっ

て、「鵜」にちなんだものである。鵜の羽に安産の霊力があるという説があるとの指摘が、坂本太郎等校注『日本書紀』（岩波書店）（以下、古典文学大系本『紀』という）の補注にある。

鵜に限らず鳥の「羽」は「ハ」であるが、例えば「方」には「ハウ」と「ホウ」の両音があって、意味によって使い分けられるように、「ハ」音と「ホ」音は転じやすい音である。ウガヤを「鵜の羽（ハ）」から説明する仕方に、「ハ→ホ」音を連想させ、オシホミミ以下3代の「ホ」音に共通する要素をウガヤフキアヘズにも与えようとしたとみられる。

父は鵜〔一般化して鳥〕の霊力に守られて誕生しており、その子神武にも鳥の霊力の保護が継承されている。三代の「ホ」に込められたすべての重層的なイメージに、また鳥の霊力の保護を象徴する「ハ（羽）」の音転の「ホ」を付加したものが、神武ヒコホホデミの「ホ」であった。

本居宣長以来「ホ」を稲穂とし、穀霊とする説が主流である（『古事記伝』）が、そのように単純なものではない。以上みてきたように「火」であり、「水」であり、「稲穂」であり、「崇高」であり、抽象化された「鳥」であるものが、「ホ」なのである。これらのことは拙著『記紀の王者像』（1992年・松籟社）に詳述したので、参照していただきたい。

以上のことを念頭においた上で、神武東征物語の検討に移りたい。検討の順序は、まず『記』を資料として〔現代語訳〕し、次いで〔考察〕を加える。〔現代語訳〕部分では、筆者の加えた説明部分を〔 〕で示し、読み方または漢字表記を（ ）で示し、『記』本文の分注は〈 〉で示すことを原則とする。また〔現代語訳〕と〔考察〕は、多数の『古語辞典』類を参照したが、特に必要を認める場合以外はそれを注記しない。〔考察〕にあたっては、研究史に一定の配慮をし、先行業績を参考にしたもの、叙述の一貫性を保つために、古典文学大系本『紀』の頭注と補注以外の場合は、注記を省略した。なお上代語には甲音と乙音の区別があるものがあり、たとえば現代音では同音の「日（ひ）」は甲音で「火（ひ）」は乙音と、

両者は厳密に使い分けられていたというのが、発音から連想して考える際には両者は酷似音であり、必ずしも厳密にそれにこだわったとは考えられない。以下の説明では甲音と乙音については、厳密な区別をしなかった。

2 神武東征経路の大阪関係地名などをめぐって

(1) ヒムカ（日向）からクサカノタデツ（日下之蓼津）まで

〔現代語訳〕

カムヤマトイハレヒコ〔神武〕とその兄イツセの2人は、タカチホ宮で相談をして、「どこの地に居住すれば、平安に天下の政治を行えるだろうか。やはり東へ行くことにしよう」といい、ヒムカ（日向）から出発してツクシ（筑紫）へ行った。そこでトヨ国のウサに到った時、その地の人、名はウサツヒコとウサツヒメの2人は、アシヒトツアガリ宮を作り、オホミアへ〔数多くの立派な食料〕を献上した。

その地〔ウサ〕より移って、ツクシのヲカダ宮に1年とどまった。

またその国〔ツクシ〕より上り行き、アキ国のタケリ宮に7年とどまった。

またその国〔アキ〕より移り上り行き、キビ（吉備）のタカシマ宮に8年とどまった。

またその国〔キビ〕より上り行く時、亀の甲に乗って、釣りをしながら羽ばたき来る人に、ハヤスヒト（速吸門）で出会った。そこで〔その人〕呼び寄せて、「おまえは誰だ」と尋ねると、〔その人は〕「私は国つ神〔土着の神〕だ」と答えた。また「おまえは海道を知っているか」と尋ねると、「よく知っている」と答えた。また「従者として奉仕するか」と尋ねると、「奉仕する」と答えた。そこでサヲ〔棹〕を〔その人に〕差し渡し、その〔イツセらの〕船に引き入れて、名を与えてサヲネツヒコと名づけた。〈この人は倭国造の祖である〉。

このようにして、その国〔ハヤスヒトの所在する国〕より上り行き、ナニハノ渡（わたり）〔ナニハ港〕を経由して、アオクモノ（青雲の）シラカタ津〔津は港の意味〕に到着した。

その時に、トミノナガスネヒコは、軍を起こして〔イツセラを〕待ち受けて戦った。そこで〔イツセラは〕船に入れておいた楯を取って降り立った。故にその地を名づけてタテツ（楯津）という。今はクサカノタデツという。

ここでトミヒコと戦った時に〔神武の兄の〕イツセは、手にトミヒコのイタヤグシ（痛矢串）〔猛烈な矢〕を受け、〔重〕傷を負った。

〔考 察〕

神武の兄のイツセの名は、大系本『紀』頭注に「イツは巖（いつ）・斎（いつ）くのイツ、セは神稲の意のサの転であろう。マ（目）→メ、タ（手）→テのごとく、a→ëという音変化がある」とあり、それに従いたい。

タカチホは「タカ（偉大な）・チ〔霊）・ホ〔多重イメージ『ホ』〕」であり、ヒコホホデミ〔神武〕ら「ホ霊」の宮であることによる命名である。イツセの名の「セ」つまり「サ」は神稲であり、稲穂のイメージが込められており、兄の名も「ホ」に関連し、兄の宮としてもタカチホの名はふさわしい。

神武と兄が相談していった言葉は、どちらの発言とも理解できる。以下の場面では現代語訳では〔イツセラ〕を補ったように、主語がすべて省略されているが、続く場面はイツセを中心にする。したがってここでの発言も、イツセのものと解するのが正しい。

イツセの発言の中に「東へ行く」つまり日の出の方角へ進むことがあるから、日に向かうヒムカ（日向）の地名が出発地として構想されている。もちろんいわゆる「天孫降臨」の地として日向が設定されているから、そこが出発地となるのであるが、なぜ日向が降臨の地として設定されたかを考えると、上記のように「東へ行く」発想によるものと考えられる。それ

が隼人との関係などから、南九州〔宮崎県・鹿児島県〕の地に「日向」が当てられたのであり、日向の地名が先にあって、そこを降臨したがって東征の出発点としたのではない。いわゆる「国生み」神話ではツクシ島〔九州島〕は、筑紫国・豊国・肥国・熊襲国〔熊襲は隼人の別名〕の4国より成り、ヒムカ（日向）は熊襲国に含まれる地域名にすぎない。

ヒムカから出発してツクシへ行ったことを明記するのは、ツクシが「尽（つく）し」であり、ヒムカの属するツクシ島地域の「尽きる場所」と考えてのことである。ツクシのヲカダが記されているのは、ヒムカの「ヲカ〔陸〕」が尽きるからであり、ダ＝タは「田地」の意味で付加されている。1年という時間が明記されていることについては、タケリ宮のところで述べる。

ツクシまでにトヨ国のウサの地を経由するが、ウサは「ウ〔得る〕・サ〔神稲〕」であり、ウサツヒコ〔ウサの男〕・ウサツヒメ〔ウサの女〕の食料献上はウサの語による構想である。宮の名がアシヒトツアガリというのは、食料を献上するのに「高坏（たかつき）」に盛りつけて献上したことを表現した語である。アシヒトツは高坏の長い1本の足の表現で、アガリは「献上される」という意味で付されている。

ウサのサは「神稲」であるから、ウサはトヨ〔豊かな〕国に所在することになる。この部分に「神稲」や食料が配される意味については、東征は東へ行って支配する物語であり、支配することを「食（を）す」といい、ヲスは同時に「食べる」ことでもあることによる。

ウサには別の寓意がある。ウサはウス「失（う）す」からの発想でもある。ヒムカの地から「失せ」て、東へ移動することによる名でもある。むしろウサはこの発想によって命名され、上記の発想が付加されたものといえよう。

さらにウサは「ウ〔鵜〕・サ〔漢語で補佐などのサつまり援助〕」でもある。イツセと神武らの父のウガヤフキアヘズのウは「鵜」であり、後段に

考察するように、東征物語には「鵜」が重要な役割を配されているから、それを暗示する地名としても構想されているのである。

ヲカダ宮に1年を過ごしたイツセらは、アキ国のタケリ宮で7年を過ごす。何のために7年を過ごしたかは、まったく示されていない。それにもかかわらず7年という時間が明示されているのは、7年という時間の経過の明示を必要とした事情があったためである。「時間が経過する」を意味する言葉は、タケ「長（た）け」〔下二段活用 of 動詞〕である。タケに、それが完了したことを表現する助動詞をつけると、タケタリ〔時間が経過してしまった〕となる。助動詞タリと同一の役割を果たす助動詞にリがある。タリは上二段・下二段活用 of 動詞に、リは四段・サ変・カ変・上一段活用 of 動詞に用いる。言葉に寓意を宿らせようとするときには、厳密に文法に即さなくとも差し支えなく、タケタリの意味でタケリを構想したのである。タケリが長時間を経過し終わったことを示すから、アキ「飽（あ）き」〔飽きる〕が国名として設定された。

タカシマ宮でも8年を過ごす。これも「長時間の経過」をイメージしており、タカ〔動詞 of タケは名詞 of タカの動詞化したもの〕の語が発想され、その形容詞形タカシにマ「間〔時間〕」が付加された。長期間が経過したと想定するから、その場所で「準備〔備え〕」を「良くした〔吉〕」が連想され、タカシマは吉備に所在するとした。

タケリ宮もタカシマ宮も、時間の長い経過を示そうとする発想からの名であり、アキ国やキビもそれにとまなうものである。ヒムカからここまででは、「支配しよう東へと出発して〔ヲスためにヒムカってヒムカのツクシからウセ〕」、「長い時間を経過した〔タケリまたタカシマ〕」ことから、次々に地名や人名が連想されたにすぎない。

キビを出てハヤスヒトにいたるが、キビは「備え吉し」であるから、その立派な軍勢は誉めたたえられる。「誉めたたえる」意味の語は「映（は）やし」あるいは「栄（は）やし」であり、ハヤスヒは「ハヤス〔誉めたた

える〕・ヒ〔靈〕」であり、場所を意味するトが付された。またハヤスには「立派ならしめる」という意味もあり、やはり「備え吉」からの連想である。

『万葉集』巻17・3895の歌に「玉はやす 武庫の渡に 天（あま）づたふ 日の暮れゆけば 家をしそ思ふ」がある。大系本『万葉集』の頭注に「玉はやす一枕詞。ムコにかかる。かかり方は不明」とある。「玉」は「靈（ひ）」であり、「玉はやす」は「ヒはやす」つまり「ハヤスヒ」と同一である。武庫は兵器庫でもあるから、それを守護し立派ならしめる靈をムコの枕詞としているのであり、キビにも同じようにかかる詞である。

ハヤスヒトでは、亀の甲に乗り釣りをしながら羽ばたく人に出会った。亀の甲は原文では「亀（き）甲（かふ）」であり、「吉備」の「吉（き）」を「亀（き）」に通じさせ、「備」を同意味の「構（こう）」、コウの類似音カフ（甲）とした。あるいはイツセラが出発したことに対し、祥瑞にもなりうる「亀」の出現を配した。

釣りをしながら羽ばたくというイメージは、水鳥が魚をとる姿であろう。ウサに付加した「鵜」と類似のイメージの水鳥を配して、「鵜」を忘れさせない配慮による。出会った相手に名を名乗らせることは、古代では相手への支配を意味する。水鳥のイメージの人を道案内としたのであるが、後段の熊野山中でのヤタカラスの道案内と同じ趣向であり、ヤタカラスの道案内の投影であり、「亀の甲」以降の部分は二次的に付加された部分である。

サヲ〔棹〕を渡してイツセラの船に引き入れたから、サヲネツヒコの名を与えたとあるが、『記』のこのような説明部分は、人名や地名などの本来の構想を隠すための付加である。

サヲネツヒコは、「サ〔小さな〕・ヲ〔小さな〕・ネ〔根〕・ツ〔助詞「の」〕・ヒコ〔男〕」であり、「小さく根を張った男」のイメージからの命名である。倭国造の祖と結合されたことから、イメージされた名であり、

後述するように物語の本筋に結合した名ではない。

ナニハの地名は、ヤマト地域に到着したことを示すためのもので、「ナ〔汝、おまえ〕・ニハ〔領域〕」であり、「おまえの〔支配〕領域」のイメージによる。シラカタ津は、「シラ〔支配する〕・カタ〔不完全なこと〕」であり、「不完全な支配」のイメージによる。トミヒコという敵対者があらわれ、支配できなかった物語による構想である。シラカタの形容語のアラクモは、「ア（吾）〔私〕・ヲ（緒）〔「玉の緒」で生命〕・クモ〔「雲」つまり「陰（かげ）り〕」で、「私の生命がかげった」というイメージによる。イツセが重傷を負った物語による。

タテツの地名を楯を立てるから説明するが、例によって作為的な隠ぺいである。敵対者が串を立てていた場所であり、串を立てることは領有の宣言を意味する。敵対者トミヒコの土地であったことから、トミヒコが「串」を「た（立）てつ」とまず発想し、次いで「串」にイタヤ〔猛烈な〕の形容を付してイタヤクシとし、イタヤクシのヤを「矢」として、トミヒコの「ヤ」をイツセが受けた物語とした。

イツセ負傷の部分の原形は、「その地では敵対者が串を立てて領有していた」というにすぎない。「串を立てて領有していた」というのは、敵対者がいれば敵対者はその地を領有していたに違いないという発想によるものだから、「その地には敵対者がいた」というのが根本のイメージである。

その敵対者のトミノナガスネヒコの名のトミノは、「富みの〔豊かな〕」である。ナガスは清音のナカスで「中洲」の漢字が対応し、「中洲」は『紀』に多出するが「ウチツクニ」と読み、ヤマト地方の意味である。ネは「根」である。トミノナガスネヒコの名は、「トミノ〔豊かな〕・ナガス〔ヤマト地方〕・ネ〔根を張った〕・ヒコ〔男〕」が根源のイメージである。この名に対応して、上述の「小さく根を張った男」サヲネツヒコの名が構想された。

以下の段には、「トミヒコ」とだけの名で記される。トミヒコはイツセ

らのヤマト地方進入をいったんは防止しており、イツセらを「止め」る役割を果たす。トミ〔「富み」〕の已然形と命令形はトメ〔「富め」〕であり、「止め」つまりトメと同音である。トミヒコのトミは「富み」の背後に、「止め」を連想させる名として構想されている。

クサカノタデツのクサカは、「ク〔苦〕・サカ〔逆＝反逆〕」である。クサは「奇」をクスともクシとも読むことからすれば、クスやクシからクサを連想したともいえる。「奇さ」で〔人智を越えた不思議さ〕を意味し、カで〔場所〕を示したとも考えられる。ノは助詞の「の」、タデツはタテツを濁音化したにすぎない。この付加も、物語の地名の本来の発想を隠ぺいし、あたかも史実であり現在の地名が対応するかにみせかけるためのものである。

結局、「ナニハ〔イツセの支配領域〕に着いたが、タテツ〔串が立っており＝すでに支配者がおり〕で止められた」という単純な原形から、次々に人物名や地名や物語が構想されている。

（２）チヌ（血沼）海からヨシノ（吉野）までの物語

〔現代語訳〕

そこで〔タテツで重傷を負ったイツセは〕、「私は日神〔太陽神〕の御子（みこ）であるのに、日〔太陽〕に向かって戦ったのがよくなかった。だから〔トミヒコのような〕卑賤な奴に重傷を負わされた。今より、迂回して、背中に日を背負って〔敵を〕撃とう」と決意して、南の方に迂回した時、チヌ海で手の血を洗った。それでチヌ海という。

そこ〔チヌ海〕より廻わって、キ（紀）国ヲノミナト〔ヲの港〕に到着して、〔イツセは〕「卑賤な奴〔トミヒコ〕のために手負いになって死ぬのか」とヲタケビ〔勇猛な様子を示し〕つつ死去した。そこでそのミナトをヲノミナトという。〔イツセの〕陵はキ国のカマヤマ（竈山）にある。

そこでカムヤマトイハレヒコ〔神武〕は、その地〔カマヤマ〕から廻わ

り行き、クマノ（熊野）村に到った時、オホクマカミ（大熊髪）が出現し〔村に〕入って、すぐに姿を消した。ここにカムヤマトイハレヒコは急に病み疲れ、〔神武の〕軍勢もみな病み疲れて横になった。

この時、クマノのタクラジが1本のタチ〔横刀〕を持って、天つ神の御子〔神武〕の横たわった所へ来て〔横刀を〕献上すると、天つ神の御子はすぐに目覚め起きて、「長く寝たものだ」といった。

そしてそのタチを受け取ると、そのクマノ山の荒ぶる神は、自然にすべて切り倒された。ここに惑わされていた軍勢も、すべて覚めて起きた。

それで天つ神の御子は、そのタチを得た由縁を尋ねると、タクラジは「私の夢では、アマテラス大神とタカキ大神は、命じてタケミカヅチ神を召して、『アシハラナカツ国は、大変に騒々しい。私の御子らは悩んでいるようだ。そのアシハラナカツ国は、おまえが言向（ことむ）けした〔言葉の力で平定した〕国だ。だから、おまえタケミカヅチ神は降臨せよ』と告げた。そこで〔タケミカヅチは〕答えて、『私が降臨しなくとも、その国を平定した際のタチ（横刀）があるから、このカタナ（刀）を降ろそう。このカタナを降ろす仕方は、タクラジのクラ（倉）の頂（いただき）を穿って、そこから落し入れよう。だから朝の目覚めも立派に、おまえ〔タクラジ〕は、〔このカタナを〕取り持って、天つ神の御子に献上せよ』といった。そこで夢の教えのままに自分の倉を見ると、本当にタチ（横刀）があった。それで、このタチを献上した」と答えた。

〔考 察〕

紙幅の都合で詳述を省略し、大要のみを記す。チヌ＝「チ〔霊〕・ヌ〔瓊（ぬ）で玉つまり霊〕」。ヲノミナト＝「ヲ〔玉の緒（を）つまり生命〕・ノ〔助詞「の」・ミナト〔港〕〕」。キ国＝イツセの死去で玉の緒が消えることから「け（消）」「消える」を連想し、さらに「ケ」の母音の交替形「キ」を発想し、また「キ（忌）〔命日〕」でイツセの死去の縁語、「キ（木）〔樹木〕」で陵のカマ（竈）〔かまど〕の縁語。またイツセは日に向かうつ

まり「晴（はれ）」の世界から、影を背負う世界つまり「褻（け）」の世界へ入ったことを示すために、ケの母音交替形キを国名として採用した。

カマヤマ＝「カマ（鎌）〔草などを蒔る鎌〕・ヤマ（山）」でイツセつまり神稲の死去を「蒔られた」とみての発想、「カマ（竈）〔かまど〕・ヤマ（山）」でイツセの死去を変質ととらえ、稲を飯に変質させるカマドの発想。

イツセの死去により、神武らも死の世界へ移動する。クマノのクマ＝「クマ（隈）〔影〕」日を背負う影であると同時に、「〔影〕」は暗部であり、死の世界を示す。上記のようにクマ〔影〕の世界は、ケ（褻）つまりキ国に所在する。

オホクマカミ（大熊髪）＝「オホ〔大きな〕・クマ〔影〕・カミ〔神に音通した頭の毛〕」つまり「クマ〔影〕を支配する大神」でもあり、瞬時の出現であることを示す意味で「頭の毛」を発想した。イツセの死去による神武らの死の世界への移動の構想を、影の大神〔オホクマカミ〕の毒氣にあたり、病み疲れて横たわったと拡大した。

タカクラジ＝「タカ〔貴い〕・クラシ〔暗い〕」で、オホクマカミが暗世界の害神に対し、暗世界の善神を発想した。タチ（横刀）＝「立（た）ち」で、神武らが再起するつまり「立つ」ことからの発想である。「横刀」の「横」には「横たわった」イメージがあり、タチ（刀）はそれを「立てる」力があることを暗示する。

アマテラス大神とタカキ大神の登場は、タチからタケミカツチの「国譲り」神話を連想してのことである。次段以下にも同神話が重大な関係を持つ。

この部分の主題は、イツセから神武への主人公の交替にある。それにケの世界からハレの世界への舞台の転換、アマテラスらの関与、以下が一種の「国譲り」神話であることを付加している。

3 地名「ウダ」などをめぐって

(1) ヨシノ（吉野）からウダ（宇陀）への物語

〔現代語訳〕

ここ〔クマノ村〕でまたタカキ大神は教えて「天つ神の御子は、ここより奥へは入るべきではない。荒ぶる神が非常に数多い。今、天からヤタカラス（八咫鳥）を派遣しよう。そのヤタカラスが導く。その〔飛び〕立った後を行くべきだ」といった。

そこでその〔タカキ大神の〕教えさとしのままに、そのヤタカラスの後を追って行き、吉野河の河尻（かはしり）に着いた時、〔その場所には〕筌（うへ）で魚（うを）をとっている人がいた。天つ神の御子が「おまえは誰だ」と尋ねると、〔その人は〕「私は国つ神で、名はニヘモツ」と答えた。〈これ〔この人〕はアダ（阿陀）のウカヒ（鵜養）の祖である。〉

その場所から進むと、尾（を）の生（あ）る人が、井戸の中から出てきた。「おまえは誰だ」と尋ねると、〔その人は〕「私は国つ神で、名はキヒカだ」と答えた。〈これはヨシノ（吉野）首（おびと）らの祖である。〉

その山に入ると、また尾の生る人に会った。その人は巖（いはほ）を押し分けて出てきた。「おまえは誰だ」と尋ねると、〔その人は〕「私は国つ神で、名はイハオシワクノコという。今、天つ神の御子がやって来たと聞いた。それで〔ここまで〕参り迎えた」と答えた。〈これはヨシノ国巢（くず）の祖である。〉その地から蹈（ふ）み穿（うか）ち越えて、ウダ（宇陀）に進んだ。このために〔その到着地を〕ウダのウカチ（穿）という。

〔考 察〕

クマノ（熊野）のクマは影であるから、暗である。ヨシノ（吉野）のヨシは「善」であり、明である。暗から明に転じる地名として、ヨシノが選定されている。日〔太陽〕に向かったために神武の兄は死去し、そのために影であるクマノへ、つまり明から暗へ転じたことは前段にすでに指摘し

た。ヨシノではそれに対応して暗から明への転化がなされている。

カハシリは通常は川の海への流入部を指すが、ここでは川の源流を無理にカハシリと記している。これは、シリは「知り」で「支配する」意味でもあることによる。前段の部分で神武らは、クマノの「山」の荒ぶる神を平定しており、それとの対比でここではヨシノの「川」の支配が配されている。

吉野河の河尻では神武らは、筌（うへ）〔竹製の漁具〕で魚をとる国つ神〔土着の神〕に最初に出会う。この国つ神は阿陀（あだ）の鵜養（うかひ）の祖であるが、これはクマノの道案内のヤタカラスに対応したものである。鵜も鳥も全身が黒い鳥であり、ともに「ウ」と発音する。ヤタ「カラス」はヤタ「ウ」でもあり、「ウ」は鵜でもあり鳥でもある。なお神武の父が鵜の羽にまつわる名のウガヤフキアヘズであることが注意され、鵜でも鳥でもある「ウ」には父のイメージも複合されているが、それらの象徴がヤタ鳥である。

アダのウカヒのアダの清音アタは、神武の日向時代の妻のアタノヲバシ君の妹アヒラツヒメのアタに通じる。また神武の曾祖父ヒコホノニニギの妻の名のアタツヒメ〔アタのヒメ〕のアタに通じる。ヒコホノニニギの降臨地は九州のヒムカ〔日向〕でなくとも、ヨシノのヒムカ〔日に向かう場所〕であってもよいことになる。それはともかくとして、アタのウカヒには降臨以降の物語が凝縮されており、それをヤタ鳥に統合させる目的を、この部分にはうかがうことができる。

神武らがウカヒの祖の次に出会うのは、井戸のなかから出現した尾の生えた人牛ヒカであり、次に巖（いはほ）を押し分けて出現した尾の生えたイハオシワクである。尾の生えた人は、原文では「生尾人」であり、「生」は「ウ」とも訓めるから「ウヲ人」であり、ウヲは魚である。ウカヒの祖が魚をとっていたとあるのは、彼らを支配下におさめていたことを示す。したがってこの部分にはウカヒの祖が「生尾人」を服属させる物語が省略

されたとみることができる。

また井戸といい、巖といい、地中をうがつイメージがあり、それからすればこの部分には、ウカヒの「鵜」が水中を水をうがって進むように、地中また岩をうがって進むものを支配していることも暗示されている。

巖を押し分けて出現したイハオシワクは、神武らに「天神（あまつかみ）の御子幸行（い）でましつと聞けり、故、参向（まるむか）へつるにこそ」と告げる。「その地より蹈み穿（うか）ち越えて、宇陀に幸（い）でましき、故、宇陀の穿（うかち）と曰ふ」とある。

この順序からいって、巖をうがってウダのウカチに出たことになる。ウカチの地名から「穴をうがつ」を連想し、井戸や巖を押し分けることを連想し、彼らの支配者としてウカヒを発想するのであるが、連関は彼らとウカヒの間で途切れている。それを彼らに尾を生やすことで強引に「ウヲ」とし、魚につなげて、魚をとる国神ウカヒの祖につなげた。

きわめて強引な付会がなされており、これが本来の姿とは考えられない。ヤタ鳥に「鵜」のイメージを込めようとした副産物であり、「鳥」に「ウ」発音のあることを想起させるためのものである。したがってウカチもウダも、ヤタ「ウ」に関係するのが原形といえる。

ヤタ「ウ」の道案内でウダへ出たのであるから、「ウが神武らをその地に出した」という発想によって「ウ・出（ダ）」と関係付け、神武らが道に迷った状況に「ウによって勝った〔勝ち（カチ）〕」という発想からウカチの名と関係付けた。

さらに付言すれば、中国思想では日神〔太陽神〕の化身は鳥であるから、ヤタカラスの導きだけで物語は十分に成立する。それをクマノに対してヨシノを示し、鳥に対して鵜を強引に付会する構想の背景には、吉野で妻ウノの助力のもとに蜂起を決意した天武の壬申の乱を連想させようとする寓意がある。これがなければこれほどまでに強引な、「ウ」への関係付けはなかったであろう。

また鵜が土と関係する物語は、すでに神話部分のオホクニヌシの「国譲り」の物語にみえている。オホクニヌシはアマテラスの命によって、天つ神〔アマテラス〕に国土の支配権を譲り、出雲国のタギシ〔でこぼこした様子の表現〕の浜辺に殿舎を作って天つ神の使者たちをもてなす。その際にミナト〔河口または港〕神の孫のクシヤタマ〔クシ＝霊威のある・ヤ＝多数・タマ＝霊〕神は、カシハデ〔料理人〕となった。使者たちに食事を献上する時に、クシヤタマ神は、鵜に化して海の底に入り、底のハニ〔赤土・土〕を食いちぎってアマノヤソヒラカ〔アマノ＝美称・ヤソ＝多数・ヒラカ＝平たい土器〕を作り、また海藻の茎（くき）を取ってきてヒキリ臼〔発火用具の臼〕を作り、さらにコモ〔海藻の一種〕の茎でヒキリキネ〔発火用具の杵。臼と一対になり火をつくる〕を作り、発火させた。

鵜に土を食いちぎる役割を与えており、ウが土をうがつという発想はすでに存在する。神武のヤマト平定は、後段の考察に示すように、ニギハヤヒの「国譲り」物語の要素を持つものであり、オホクニヌシの「国譲り」物語の繰り返しの要素を持っている。

要するにこの部分の主題は、ヤタ「ウ」の助力によって神武はハレの舞台に登場した、というにすぎない。

（２）ウダでの物語

〔現代語訳〕

ウダにはエウカシ〔兄ウカシ〕とオトウカシ〔弟ウカシ〕の兄弟がいた。そこでまずヤタ鳥〔鵜・カラス〕を派遣し兄弟に、「今、天つ神の御子〔神武〕がやって来た。おまえらは〔神武に〕奉仕するかどうか」と問わせた。

兄ウカシは、鳴鏑（なりかぶら）〔音を発する鏑矢〕でヤタ鳥を射て、追いついた。その鳴鏑の落ちた地を、カブラサキという。〔兄ウカシは神武らを〕待ち受けて攻撃しようと、軍勢を集めた。しかし〔兄ウカシは〕軍

勢を集めることができなかったので、〔神武に〕奉仕すると偽って、大殿をつくり内部に押機（おし）〔圧死させるための機構〕を仕掛けて〔神武を〕待った。

その時に弟ウカシは、〔神武らのところに〕参上して、〔神武らを〕拝して、「私の兄の兄ウカシは、天つ神の御子〔神武〕の使者〔ヤタ鳥〕を矢で射て追い返し、〔神武らを〕待ち受けて攻撃しようと軍勢を集めたが、集めることができなかったので、殿舎をつくって内部にオシを仕掛けて、〔神武を〕待ち殺そうとしている。それでこのように参上して、〔兄ウカシの計略を〕明らかにして申し上げます」と述べた。

そこで〔神武方の〕オホトモ（大伴）連（むらじ）らの祖のミチ臣（おみ）と、クメ（久米）直（あたへ）らの祖のオホクメのふたりは、兄ウカシを呼んで罵倒して、「おまえが作り奉仕した大殿の内に、おまえがまぐ入って、奉仕する様子を明らかにみせよ」といい、刀の柄（つか）に手をかけて、矛をゆらし、矢を弓につがえて、〔兄ウカシを殿舎内に〕追い入れると、〔兄ウカシは〕自分の仕掛けたオシに打たれて死亡した。

〔兄ウカシの〕死体を〔殿舎から〕引き出して、切り散らした。このためにそこをウダのチハラ（血原）という。

その上で、弟ウカシが献上したオホミアヘ（大饗）〔立派な食事〕を、すべて〔神武方の〕軍勢に与えた。この時に歌って、

1 ウダの 高城（たかき）に 鳴（しぎ）毘（わな）張る 我が待つや
鳴は障（さや）らず いすくはし クヂラ障る 前妻（こなみ）が 肴
（な）乞（こ）はさば 立稜麦（たちそば）の 実の無けくを こきし
ひゑね 後妻（うはなり）が 肴乞はさば 斎賢木（いちさかき）実
の多けくを こきだひゑね ええ〈音を引き延ばせ〉しやごしや こ
はいのごふぞ ああ〈音を引き延ばせ〉しやごしや こは嘲笑（あざ
わら）ふぞ

と歌った。弟ウカシは、〈ウダの水取（もひとり）らの祖である〉。

〔考 察〕

ウダに込められたイメージは、上述の「ウ・出（ダ）」だけではない。ウダを清音にしたウタは、「歌」である。『記』の中巻にはじめての歌、『紀』の神武条にはじめての歌が1で、ウダでのエウカシ打倒の直後に配されている。

1の歌は難解な歌である。前段は鳥のシギをとるための罠を仕掛けたが、鷹〔古名クチ〕がかかったとも、鯨がかかったとも解せる。中段は前妻を冷遇し、後妻を優遇する意味である。後段は囃子言葉であり、本来は「ええ　しやごしや　ああ　しやごしや」で分注に発声上の注意があり、また本来は同種の注意である「こはいのごふぞ」〔この部分は威勢よく〕、「こは嘲咲ふぞ」〔この部分はあざけるように〕が本文に紛れ込んでいる。

前段と中段と後段は、対応関係を持つようにはみえない。ともかくも歌は、ウダでのエウカシ打倒とは直接にも、イメージとしても関係するものではない。むしろシギの清音形のシキがあることで、『記』の神武らによるエシキ・オトシキ（兄師木・弟師木）打倒、『紀』のエシキ・オトシキ（兄磯城・弟磯城）らシキヒコ（磯城彦）打倒の場面に対応していると考えられる。このことや歌が食品に関するものであることなどは、後に述べる。

さらに後にも述べるが、『記』はヤマト平定に兄ウカシ打倒、ヤソタケル打倒、兄シキ・弟シキ打倒を記すが、すべて歌を中心としている。打倒が物語らしい物語を伴うのは、『記』ではエウカシ打倒だけであり、他にはヤソタケル打倒に簡単な物語がある。つまり歌を中心に神武らのヤマト平定は記されているわけで、ウダの地名はそうしたウタ（歌）物語にふさわしいと考えられる。

ウダに込められた第3の寓意は、この地を出発点として敵を「撃（う）つ」あるいは「打つ」ことにある。「撃・打（う）つ」を語形変化させた「ウタス」などの語幹のウタでもある。兄ウカシ打倒の物語ではウダの清音ウタは、具体的に押機によって兄ウカシの身体を「打つ」ことと、敵で

ある兄ウカシを「撃つ」構想に2重につながっており、ウダに込められた第3の寓意が証明される。

兄ウカシの名のウカシは、「ウ（得る）・カシ（首や手足の自由を奪い圧迫する道具）」であり、カシは押機（オシ）からのイメージである。同時に「うかうかし〔軽薄である〕」のウカのイメージもある。

カブラザキの地名が採用されているのは、カブは「歌舞」をイメージさせ、歌＝ウタ＝ウダにつながるからである。ラは複数を示し、ザキ＝サキは「栄え」を意味する。

エウカシは圧死するから、圧死のさまを思い浮かべれば、その死体からは血があふれる。それをチハラの地名に結びつけるが、チは「霊」でもあるから、チハラは霊の原でもある。チである霊を出現させた人名として、「霊」のふたつの読み方である「ミ」と「チ」が構想される。兄ウカシをチ〔霊〕へ追いやった人名として、「ミチ〔霊・霊〕」の名がうまれた。神武のトモ〔仲間あるいは部下〕の立場であり、それでオホトモ連氏の祖とした。

ミチと対になって登場するオホクメの名は、前引の歌が『紀』には「来目歌」と明記されているように、クメ歌であることによる。ミチを「満ち」とみれば、水など液体が連想されるから、それを「汲め」と発想して、オホ（大）・クメの名が成立する。『記』に前引の歌1の次順に掲げられる歌〔後引の2〕に、「みつみつしクメの子が」とあり、続く2首〔後引の3・4〕にも「みつみつしクメの子らが」とあり、「満ち」の変化「満つ」はクメの枕詞でもある。

弟ウカシが立派な食事を献上する部分は、すでに触れたオホクニヌシの「国譲り」神話に原形があり、同物語ではクシヤタマがカシハデ〔料理人〕になり、また鵜に変身した。鵜飼に使われる鵜は、食料となる魚を取ってくるから、鵜は料理人〔カシハデ〕のイメージにつながる。

そうすれば弟ウカシが立派な食事を献上したことからみて、弟ウカシの

『古事記』の神武東征物語考

ウは「鵜」でもある。カシはカシハデのカシハ〔原義では柏の葉、ただしカシハは「柏」だけの読み方でもあり、「柏」はカシとも読む〕のカシであると同時に、カシはクッシ（菓子）〔時でない時に食べる食事〕と近似音でもある。弟ウカシが立派な食事を献上する発想は、これにもよるものである。すでに述べたように、支配の物語は「ヲス〔支配する〕」物語であり、それと同発音の「ヲス（食す）〔食事をする〕」物語がすぐに連想されているのである。1の歌の前段と中段が食品歌であるのも、同発想によるといえる。

結局、兄ウカシ打倒の物語は、ウに根拠を持ち、そのウからヤダ「ウ」＝ヤタカラスを登場させ、ウダやウカチの地名を構想した。またヤタ「ウ」を撃つ矢を、ウタ〔歌〕から「歌舞など」〔歌舞ら・カブラ〕＝鳴鏑、鳴鏑からカブラサキの地名、ウタにつながるウツから押機で打たれる物語、押機から兄ウカシの名、兄ウカシの圧死から血、血からチハラの地名、チから霊、霊からミチ臣の名、ミチ臣の名と「クメ歌」からオホクメ命の名が構想されている。また弟ウカシの名から、食事の献上の物語と食品歌が付されたが、この弟ウカシの名のウは物語全体の根拠のウにちなむものであった。兄ウカシ打倒物語はこのようにすべてウ〔鵜・鳥〕に収束する。

（3） オシサカのヤソタケルの平定物語

〔現代語訳〕

ウダから神武らは忍坂（おしさか）の大室（おほむろ）に移動したが、そこには「生尾土雲（をあるつちぐも）」の八十建（やそたける）〔多数のタケル〕が待ちかまえていた。神武は命じてヤソタケルに御馳走し、ヤソタケルの数と同数の八十膳夫（やそかしはで）〔数多くの料理人〕を準備した。ヤソカシハデに刀を着けさせて、歌を聞いたら一時に敵を切れと命じた。ツチグモを撃つことを明らかにして、次のように歌った。

2 忍坂の 大室屋に 人多（さわ）に 来入（きい）り居（を）り 人多

に 入り居りとも みつまつし 久米の子が 頭椎（くぶつつい）石
椎（いしつつい）もち 撃ちてし止（や）まむ みつまつし 久米の子
らが 頭椎い 石椎いもち 今撃たば良（よ）らしな。

このように歌って、刀を抜いて、一時に打ち殺した。

〔考 察〕

オシサカのオシは「圧迫する」、サカは「逆（さか）ひ」「反逆する」の語幹のサカである。反逆する者を圧迫するという、物語の発想による。

オホムロヤのオホは「大」、ムロは「群（む）れ」「群衆」の語尾変化、ヤは感動の意味を持つ助詞である。「大変な数の（反逆の）群衆であることよ」という意味から、大きなムロヤ〔洞窟〕が構想されている。

反逆するムレ〔群衆〕をオシ〔圧迫する〕から、コム「籠（こ）む」〔詰め込む〕が、コメからクム「組む」〔入り組む〕が連想される。コム・クムの近似音クモ〔雲・蜘蛛〕が構想され、ムロヤ〔洞窟〕との連想で、ツチグモ〔土雲・土蜘蛛〕とつながっていく。ツチグモにウヲ〔「生尾」〕の形容がつくのは、前の物語から継承するウ〔鵜〕と「ウヲ（魚）」の関係による。

反逆者の形容としてタケル〔猛々しい〕を、多数の別表現のヤソを付加して、ヤソタケルの名を構想した。

ここにも食事の物語が付されているが、これは繰り返すが「ヲス〔支配する〕」物語から、「ヲス〔食事する〕」物語が連想されているのである。また久米歌を付属させたので、クメから「供米（クマイ）」〔神仏に供える米〕つまり食事を連想し、ヤソタケルに御馳走する話とも構想した。御馳走からはヤソタケルと匹敵する数のヤソカシハデ〔多数の料理人〕が構想されたが、その背後にはカシハデに関係するウ〔鵜〕の姿が秘められている。またツチクモのクモがクム（組む）から変形したものであることは、ツチクモのヤソタケルとヤソカシハデを1対1で「組」ませるということにもうかがえる。

このオシサカの物語は、多数のサカ〔反逆者〕をオシ〔支配する〕という一点から、次々と連想を広げた物語にすぎない。また物語の背後にカシハデとウの関係を配した点では、弟ウカシの食事献上の話を下敷にしたものである。

(4) トミヒコ、エシキ・オトシキの平定物語

〔現代語訳〕

その後、トミヒコを撃とうとする時に、次のように歌った。

3 みつみつし 久米の子らが 粟生（あはふ）には 韭（かみら）一茎
（ひともと） そねが茎（もと） そね芽（め） 繋（つな）ぎて 撃ちてし
止まむ

また歌った。

4 みつみつし 久米の子らが 垣下（かきもと）に 植ゑし椒（はじか
み） 口ひひく 吾は忘れじ 撃ちてし止まむ

また歌った。

5 神風（かむかぜ）の 伊勢の海の 大石（おひし）に 這（は）ひ廻
（もとは）ろふ 細螺（しただみ）の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ
また兄師木（えしき）、弟師木（おとしき）を撃った時に、〔神武の〕軍勢は
疲れていた。そこで歌を歌った。

6 楯（たた）並（な）めて 伊那佐（いなさ）の山の 樹（こ）の間よも
い行（ゆ）きまもらひ 戦へば 吾（われ）はや飢（ゑ）ぬ 鳥つ鳥
鵜養（うかひ）が伴（とも） 今（いま）助（す）けに来（こ）ね
このようにして、ここにニギハヤヒ命（みこと）が〔神武らのところに〕
出向いて来て、〔神武すなわち〕神の御子にいうには、天つ神（あまつか
み）の御子が天下（あまくだ）りしたと聞いたので、後を追って下ってき
た、とのことだった。そういうとニギハヤヒは自分が天つ神の一族である
証拠の品を献上して、〔神武に〕仕えた。

このニギハヤヒがトミヒコの妹のトミヤヒメと結婚してできた子が、ウマシマヂ命である。

このようにして、荒ぶる神たちを言葉の力でやわらげ、服従しない人どもを平定して、ウネビのカシハラ宮に居して、天下を支配した。

〔考 察〕

トミヒコ平定にも、エシキ・オトシキ平定にも、物語はなく、ただ歌だけが配されている。トミヒコは神武らの軍勢をかってシラカタ津で待ち受けて、神武の兄を負傷させた。いわば神武の最大の敵であるのに、平定物語が付されていない。これは不自然であり、このような不自然が出現するのは、トミヒコが物語の原形では最大の敵対者ではなかったためと考える以外に、解釈の余地はない。

エシキのエは「兄」、オトシキのオトは「弟」である。シキは「敷き」〔一面を覆う〕であり、前の物語のムレ〔群衆〕のイメージを継承している。シキの平定に関係する歌が、「ウカヒ（鵜飼）」の援助を要請する歌である。これは、ヤタ烏（う）の道案内でヤマトのウダに到着する冒頭に対応する。

またウが冒頭と終末に登場する結構を考慮すれば、冒頭の歌に「シキワナ張る」と見える語句は、エシキ・オトシキの「シキ」と対応していることになる。つまり物語の原形は、ヤマトで神武らはシキ兄弟と対決するという簡単なものであったと考えられる。

ヤマトすなわちなカス〔中州〕にシキ〔一面に覆う〕する敵は、ナカスにネ〔根〕をおろしたヒコ〔男〕であり、ナカスネヒコであった。シキする敵は、またムレ〔群衆〕するサカ〔反逆〕であり、ムロのツチ〔土〕クモ〔籠む（コム）・組む（クム）〕のヤソ〔多数の〕タケル（猛々しい）でもあった。シキは同時に「力を加えて広げる」というイメージがあるから、オシ〔押機（おし）〕に通じ、押機からカシ〔首や手足の自由を奪い圧迫する道具〕が連想され、カシをウ（得）る人としてウカシの名につながる。

神武らのヤマト＝ナカス平定のお話は、要するにシキする敵対者を打倒して平定したというだけだ、原形であるにすぎない。シキから次々にイメージを拡大して、人名や地名を構想し、トミヒコ〔富み（とみ）男（ひこ）・止め（とめ）男〕から神武らを阻止する物語化が、ウを根源とするイメージからの拡大要素をも付加してエウカシ打倒の物語化が、シキ〔一面を覆う〕と同一イメージのムレ〔群衆〕を拡大した要素からヤソタケル打倒の簡単な物語化がなされた。そしてそれぞれに歌が付加された。

神武らのヤマト平定は、ヤマト支配であり、「支配する」ことをヲスという。ヲスには別に「食べる」という意味もあることは繰り返し述べたが、このことはヤマト平定に付された歌との関係でも注目される。

すなわち1の歌のシキの音転のシギ（鳴）は食鳥となるし、クデラ（鯨）は食肉魚の総称である。ナ（肴）は食品の総称であり、ソバも食品である。3のアハ（粟）とカミラ（韭）、4のハジカミ（椒）、5のシタダミ（細螺）も食品である。6のウカヒ（鵜飼）のイメージにも、鵜のとる魚という食品のイメージがある。2には直接に食品に関する語句はないものの、ムロ〔洞窟〕を地面の穴とみれば、そこに頻繁に出入りする地蜂が想像され、かすかながらも食品〔地蜂の子は食品になる〕のイメージがある。

これらの歌は久米歌と称され、一般には新嘗祭〔その年の新穀を神と天皇が共食する儀式。天武朝に儀式化されたとみられる〕の歌といわれる。新嘗祭の歌であるから食品に関係することは明らかであるが、これがクメ歌とよばれるのは、「供米（くまい）」を「供（く）・米（め）」と音通させてクメ歌としたのであろう。

ヤマトをヲス〔食べる〕ことから歌として新嘗祭の歌が採用されたが、もう一方のヲス〔支配する〕また近似音のオス〔押す・圧倒する〕からして、戦闘歌謡の色彩を加味する必要があった。そこで「撃たば良らし」や「撃ちてしまむ」などの語句が付加されたのであり、付加は唐突であり、内容上は前に置かれた食品歌とは対応しない。

たとえば土橋寛『古代歌謡集』（岩波・日本古典文学大系）は、「来目歌（くめうた）」を解説して、1は久米部自身の集団歌謡、他の「撃ちてし止まむ」の歌は久米部の族長が部下を率いて天皇に忠誠を誓う歌という。古来このような解釈が一般的であるが、それはこれらの歌が完成した伝承歌であることを前提として合理的な解釈を付そうとした結果の説にすぎない。

これらの歌は『記』成立以前からの伝承歌である証拠はなく、新嘗祭にちなむ食品歌に、戦闘語句を無理やり付加した未成熟な歌である。それはヲスの「食」と「支配」・「圧倒」の両様のイメージを、成熟した形で歌化したかったにもかかわらず、それが不可能であったことを見事に露呈した歌なのである。したがって1の歌がきわめて難解であるのは、元の食品歌をあたかも成熟させたかにみせかけ、かつシキ打倒の寓意を宿らせるために変形が加えられていることによる。元の歌はおそらくは、伊勢などの浜辺にシビ（鮪）の罟を張ったが〔シキ罟張る〕、私の待っていた〔我が待つや〕シビはかからなくて〔シキは障らず〕、素晴らしい磯の〔いすくはし〕鯨がかかった〔クヂラや障る〕であろう。

伊勢などの磯を「ウダの高城に」とし、シビをシキに変形したために、クヂラを「鷹」の古名「クチ」に複数形「ラ」を付加したなどの解釈を生むこととなった。

「前妻が 肴乞はさば」から「こきだいゑね」までは、別の食品歌であり、食品にことよせて前妻よりも後妻がいとおいしいことを歌にしたものである。「ああ しゃこしや」の「しゃこしや」は土橋寛『前掲書』により、「エエ馬鹿よ」と解する。「こはいのごふぞ」は歌の調子に関する注釈語句で、「威勢よく」という意味である。「こは嘲笑ふぞ」も同様で、「あざ笑うように」ということになる。つまり敵に対して威圧的な、また嘲笑的な「はやし言葉」が付加されており、これも一種の戦闘語句の付加である。前の「シキ罟張る」や「前妻が」の食品歌と、内容上ではまったく関係を持たない付加である。

『古事記』の神武東征物語考

ニギハヤヒの名は、ニギは「賑（にぎ）わひ」、ハヤは「速い」で靈威が強く速やかであることを示し、ヒは「靈」と「太陽」との複合イメージである。ニギのつく名としては、神武の曾祖父にあたるヒコホノニニギがあり、ヒコ〔男〕・ホ〔火＝太陽・水・稲・鳥などの複合イメージ〕・ニニギ〔賑わい〕であった。ホニニギとニギヒは同一イメージであり、前者にヒコとノを付加してヒコホノニニギの名が、後者にハヤを付加してニギハヤヒの名が成立した。

『記』『紀』では天つ神とあるものの、それらの神話部分には登場しない神名であり、『紀』頭注もいうように世系不明の神である。ニギハヤヒは自分が天つ神である証拠品を献上して、神武に奉仕するが、これはすでに何度か触れたように、神話にみえるオホクニヌシ神のアマテラス大神への「国譲り」の物語イメージの投影である。

ニギハヤヒと結婚したトミヤヒメの名は、兄とあるトミヒコと対をなすものである。ニギハヤヒとトミヤヒメの間の子はウマシマヂであるが、ウマはウマシ「美（うま）し」の語幹で美しさを表わし、シマは「島」でナカス〔中州〕からの連想であり、ヂはチで「靈」である。

神武はウネビのカシハラ宮で即位し、ヤマト平定の物語は終結する。ウネビはウネヒであり、ウネは「〔島などの〕畝（うね）」で列状に並んでいることの形容であり、ヒは「火」である。神武はヒコホホデミであるが、その名の「ホ」に対応させて「ヒ」とし、それが行列をなしているさまを想定してウネヒの名が成立した。またウネの近似音にウヌがあり、ウヌは自分自身または相手を指すから、ウヌヒ「自分自身の火」つまり「自分自身の『ホ』」からの連想もこめられているよう。

カシハラのカシはすでにみた首や手足の自由を奪い圧迫する道具であるが、別に「船をつなぎ止める杭」の意味がある。船でナニハに到着したことにはじまる物語の終末にふさわしく、船をつなぎ止める杭のある原〔平地〕のイメージからカシハラの名が構想された。

まとめにかえて

以上分析したように神武東征物語は、簡単な構想を原型として次々と連想を広げて、地名や人名を付加していったものにすぎない。その原型は次のようなものであった。

- (1) 支配のために東へ出発して、長い時間が経過した。
- (2) 支配すべき地に到着したが、敵対者が待っていた。
- (3) 兄（イツセ）は途中で死去し、弟（神武）が主人公となった。
- (4) 神武は神々と「ウ」の援助により、敵対者を打倒した。

このように簡単な原型に収束することは、実は『記』の序文にもすでに明らかである。序文には「番仁岐（ほのににぎ）命、初めて高千嶺（たかちほたけ）に降（くだ）り、神倭（かむやまと）天皇〔神武〕、秋津島を経（へ）歴（めぐ）りき、化熊（くわいう）川に出でて、天剣（てんけん）を高倉（たかくらじ）に獲（え）、生尾（せいび）徑（みち）を遮（さへぎ）りて、大鳥（だいう）吉野に導きき、舞を列（つら）ねて賊（あた）を攘（はら）ひ、歌を聞きて仇（あた）を伏（したが）はしめき」とある。これを順に示すと次のようになる。

A 化熊が川に出現した。〔兄の死後、神武らはオホクマカミ（大熊髪）の出現と同時に、病み疲れて横たわったことを指す。しかし諸本は「川」を「爪」と記しており、『古事記伝』は「爪」を「山」の誤写とみ、古典文学大系本『記』は「川」の誤写とする。神武らを病み疲れさせたのだから、「化熊爪を出だし」でよい。「爪を出す」ことで、害を与えたことを暗示するからである。熊はクマ（隈）＝影から構想されていた。それはともかくとして、上記の（3）に相当する。〕

B 天剣を高倉から献上された。〔神武らはアマテラスらの助力によって、復活した。化熊の害を除去したことがいわれており、上記（4）に対応する。なおこの天剣は「国譲り」神話に登場する道具で、東征物語が一

種の「国譲り」神話であることを示している。]

C 生尾が道を遮った。〔物語では吉野で生尾人キヒからに会おうのであり、物語の順序が乱れている。また古典文学大系本『記』頭注では、「道いっぱいに出て歓迎して」と訳す。「遮」には「覆う」という意味はあるが、「歓迎する」という意味はない。直前の「化熊＝害」・「天剣＝除害」との対応からいっても、「生尾＝害」とみる必要がある。本稿に考察したごとく、「生尾人」を服属させる物語があったことを示している。「生尾」はウヲ（魚）であり、ヤタ「ウ」（鵜）から構想されていることも、すでに述べた。上記（４）に対応する。]

D 大鳥が吉野に導いた。〔上記（４）に一致する。「生尾人＝害」と対応し「大鳥＝除害」でもある。]

E 舞や歌で敵を打倒した。〔歌舞での敵の打倒をいう。歌は強引に関係付けられており、それだけに東征物語に実体がなかったことを物語る。東征物語はウタ（歌）＝ウダ〔←ウが出ず〕物語にすぎないことを示している。]

Aの「化熊」は〔クマつまり影の世界〕の象徴であり、それはDの吉野つまり〔善の世界つまり明の世界〕の象徴に対応して構想されたものである。Cの「生尾」はウヲ（魚）であり、Dの「大鳥〔また鵜〕」に対応する発想である。Eの「舞」と「歌」は一对のものであり、ウタは地名ウダを通じてウ（鳥・鵜）に関連する。AからEは結局、ウ（鳥・鵜）に吉野に導かれた〔D〕ことを骨格とする、一種の「国譲り」神話〔B〕である、とまとめられる。

神武の東征物語は、天武の壬申の乱を下敷にして成立しているとの説はすでに提起されているが、本稿の結論もまたそれに類似する。ただ上記の（１）・（３）を重視すれば、663年の白村江敗戦以降の天智と天武の関係も踏まえられていることになる。さらに（４）のウの助力を重視すれば、天武皇后ウノ皇女つまり持統朝の歴史をも踏まえていることになる。

（平成４年１月３１日受理）